第35回 寒地技術シンポジウムのお知らせ

notice

第35回寒地技術シンポジウムを
札幌市（札幌市教育文化会館）で開催いたします。
寒地技術に関心を持つ多くの皆さまのお申込み、
参加をお待ちしております。詳しくはホームページ
http://www.decnet.or.jp/をご覧ください。
聴講お申込み：11月20日（水）まで
（当日受付もございますのでお問い合わせください）

「寒地技術シンポジウム」
ウェブサイト

◆開催日 ： 2019年11月27日（水）～29日（金）　◆参加無料
◆会　場 ： 札幌市教育文化会館（札幌市中央区北1条西13丁目）
◆プログラム

開会式　11月27日（水）　14:00～16:50 <会場>4F 講堂

14:00～14:10　**主催挨拶**　dec理事長　山口 登美男
14:10～14:20　**寒地技術賞表彰式**
14:20～15:20　**特別講演「北海道の冬のアクティビティの今と未来」**
講師：児玉 毅 氏（プロスキーヤー）
15:30～16:50　**トークセッション**
児玉 毅 氏（プロスキーヤー）
田中 義人 氏（倶知安町議会議員、株式会社ニセコリゾートサービス代表取締役）
小笠原 啓之 氏（札幌市立新琴似北小学校長）
南 真由（dec研究員・STRAHL〈札幌カーリング協会所属〉）
【コーディネータ】新保 元康 氏（NPO法人ほっかいどう学推進フォーラム　理事長）

時間 ＼ 会場		研修室403	講堂	研修室402	研修室302
11/27（水）開場13:30	14:00～17:00	展示	開会式（講堂）表彰式 / 特別講演 / トークセッション		
	17:30～19:30		懇親会		
11/28（木）開場9:30	10:00～12:40	展示	第1分科会 寒地と防災	第2分科会 寒地と海・河川	第3分科会 寒地とまちづくり
		技術展示交流	昼食		
	13:00～14:40	展示	第4分科会 冬と交通I	第5分科会 寒地と構造物	
	15:00～17:20		第6分科会 冬と交通II	第7分科会 ほっかいどう学	第8分科会 冬と防雪I
11/29（金）開場9:30	10:00～12:40	展示	第9分科会 冬と防雪II	第10分科会 寒地と環境	第11分科会 寒地と エネルギー

お問合せ：（一社）北海道開発技術センター
「寒地技術シンポジウム」担当係（担当：向井・新森）
TEL: 011-738-3363　FAX: 011-738-1889
E-mail: ctc-01@decnet.or.jp

編集後記　先日、住宅・建築について研究をされている先生に、北海道の住宅事情についてお話を聞く機会がありました。先生のお話では、北海道の建築技術は世界最高レベルで、断熱と気密性能が高くなった分、結露がしにくくなり、家が腐るということもなくってきたとのこと。屋根の雪も、2000年以降（建築基準法改正後）の家は頑丈になったので雪下ろしの必要はないそうです。今の課題は、「換気」とのことで、スウェーデンでは、悪い空気は「サイレントキラー」と呼ばれ、疫学的にも、子供の成長にも悪影響を与えるという研究結果があるそうです。インフルエンザ対策に、換気を積極的にしていこうと思います！（MK）

dec monthly vol.409
2019年10月1日発行　発行人 編集人 山口 登美男
発行所 一般社団法人 北海道開発技術センター　〒001-0011 札幌市北区北11条西2丁目2番17
TEL(011)738-3363　FAX(011)738-1889　URL http://www.decnet.or.jp/　E-mail dec_info01@decnet.or.jp

News letter since 1985　01 OCT
Hokkaido Development Engineering Center

dec monthly

2019.10.1 vol.409　デックマンスリー

● Monthly Topic（マンスリートピック）
シーニックバイウェイ北海道が関わるサイクリングプロジェクト

dec Interview >>>　株式会社サイクルスポット　常務取締役　**加藤　京子 氏**

子どもから大人まで足代わりになるのが自転車。電動アシスト車がその可能性を一層広げています。北海道でも駅直結サイクル拠点をつくり、自転車の魅力を満喫してほしい。

「町の自転車屋さん」を標ぼうして首都圏を中心に104店舗を展開する㈱サイクルスポット。東京・中野の第1号店を皮切りに、これまで20年近く自転車小売業に専心されてきた加藤京子さんにこれまでの歩みと新たな自転車の魅力、可能性についてうかがいました。

カー用品卸の会社に就職し、その後、会社の事業見直しで新規着手した自転車販売業を任され、今日までの目覚ましい成長を牽引してこられました。もともと自転車はお好きだったのでしょうか。

特に好きだとか、自転車に対する思い入れはないのです（笑）。ビジネスとして一生懸命やってきたという感じですね。

大学では保健体育の教員免許をとり、体育教員になるか、保育士になりたかった。体育教員は、教育実習に行った際、子どもに教えること以外の職場の大変さがあることを知って、自分には向かないとあきらめましたが、保育士のような仕事は、いつかやってみたいと思っています。

結局、大学卒業後は北海道大学のスポーツトレーニングセンターで事務職に就き、夜は地域のアスレチックジムでトレーナーをしていました。サポートしたのは陸上ホッケーの選手たち。練習に熱を入れ、私たちのチームは国体に5回出場したのです。やがて北大の事務職は性に合わなくて辞めることになり、職業安定所で見つけたのが日本自動車㈱札幌支店の経理の仕事でした。

会社は自動車関連の歴史ある企業ですが、当時から業績は伸び悩んでいました。手を挙げて営業に取り組み、徐々に成績は上向きに。さらに全社的に物流や在庫管理部門の改善が必要ということで、全国の支店を回って改革に当たりました。やがてトップに東京本社の立て直しに来てくれと求められて上京。それが2000年のことで、今日まで約20年続く、夫を北海道に残しての単身赴任の始まりでした。

間もなく会社はカー用品卸専業では行き詰まると新規事業を模索することになり、トップが思いついたのが自転車販売業。私が任されることになりました。自転車について全く知識はなかったのですが、1年ほど研究して2002年に中野に18坪の第一号店を開店。それがみるみる軌道に乗り、首都圏で10店舗に増えたころ、会社は従来のカー用品部門を清算して自転車販売会社として再出発しました。

東京・中野出店を原点にした自転車ビジネス成功の要因は何でしょうか。

第一号店を中野に決めたのは、当時、中野駅周辺が放置自転車だらけで、行政に撤去された自転車を引き取るには5千円かかる、ということがありました。新車1台1万円ぐらいの時代でしたから、古い自転車の回収に5千円かかるなら、新しい自転車を買おう、という人は少なくないはずだと（笑）。それで最初の1年は中古自転車を解体して組み立て直し、色も塗り直してリニューアルする中古自

dec Interview

かとう　きょうこ
虻田郡真狩村生まれ。1982年北海道女子短期大学（現・北翔大学）卒業。中学校保健体育免許取得。北大スポーツトレーニングセンター（事務職）を経て、85年日本自動車㈱札幌支店に経理担当で入社。営業、業務を経て、2000年東京支店へ。新規事業として立ち上げた自転車販売事業で手腕を発揮し、02年に東京・中野に第1号店を開店以来、107店舗を展開。（一社）日本サイクルツーリズム推進協会理事。茶道、華道は師範代の腕前。

転車販売が主力でした。そうしたら、注文が殺到したのです。全く素人で始めたので業界からは異端視されていたようですが、地域のお客さんの支持は凄かった(笑)。

当時考えたのは、とにかく他の自転車店とは違うことをやろう、ということでした。入り口はいつでも開放して入りやすく、自転車修理はその場で着手して早く渡せるようにする、商品はママチャリから高級車まで自転車であれば何でも揃えると。そのようにしていったら、お客さんはどんどん増え、ご近所のお得意さんから頻繁に感謝の差し入れがあったりして、私自身、本当に感動しました。自転車小売店にとって首都圏は競争も激しいけれど、すべてが集中している利点は大きい。自転車販売で成功するには首都圏を重点にすることが大事だと思っています。

近年は道内でも高級自転車でツアーを楽しむサイクリストや電動自転車の愛用者が増えてきました。自転車をめぐる時代変化をどう受け止めておられますか。

最近は街中に放置自転車があふれるような状況は見なくなり、一時は全国で1千万台という自転車市場も近年は700万台程度に縮小しています。東京では自転車の高級化が徐々に進み、2010年ごろを節目に、坂道も楽に乗れる電動アシスト車が主流になってきました。1～2万円ほどで気軽に買えた一般車と違い、電動車は10数万円。自転車を大事に乗る、という、ある意味でまともな時代になってきたと思います。最近、業界はスポーツEバイク(スポーツタイプの電動アシスト車)に力を入れていますが、当社でも多様な自転車の楽しみ方を広げようとツアーやイベントの企画に工夫を凝らしています。

また、自転車活用推進法(2017年施行)が追い風となり、全国的にサイクルツーリズムに取り組む自治体が増えてきました。私たちもそういう動向に注目し、新たにチャレンジしたのが、昨年オープンした茨城県土浦市の全国初の駅直結サイクリング拠点施設「りんりんスクエア土浦」への出店です。家族ぐるみで手ぶらで来ても、駅からそれぞれ好みの自転車を借りて近郊サイクリングが楽しめ、シャワー室や更衣室などサイクリストに必要なサービスがワンストップで提供できる施設です。その一角を占めるのが当社の「ル・サイク土浦店」で、自転車や自転車グッズ販売、レンタル、修理・メンテナンス、サイクリング情報の提供などを行っています。

観光地でレンタサイクルは珍しくありませんが、乗るなら、きれいでよく整備され、自分に合った自転車に乗りたい、そして楽に乗れる電動車に乗りたいという人は多いはずです。そうしたニーズに応えるサイクル拠点は、今後、全国各地で求められるのではないでしょうか。

どうしたら自転車に乗る人を増やしていけるか、たゆまず考えてこられたことと思います。加藤さんが伝えたい自転車の素晴らしさとは何でしょうか。

行きたいところに行けるのが自転車。歩くより格段に行動半径が広がり、景色を楽しむのに最適なのが自転車です。私は子どもたちが自転車に乗っている姿を見るのが大好きで、子どもでも群れをなして走るときには、いろいろと人に対する気遣いが大事になる。そうした経験も含めて、自転車は人の心を豊かにすると思っています。小さな子どもから大人まで足代わりに乗れる乗り物って、他にありますか。

ですから、子どもたち対象の自転車教育をぜひ推進していきたい。そういう願いもあって英国で自転車教育を学んだ西田恵理子さんが代表理事をされているJCTA((一社)日本サイクルツーリズム推進協会)の活動に理事として参画しています。当社の社員にもインストラクターの養成講座を受講させていますが、子どもたちが安全、快適に自転車に乗るためのルールやマナーを学べる全国一律のカリキュラムができればいいですね。各メーカーや販売店など業界でも、そうした文化を広げていこうという気運が生まれています。

土浦での子供自転車教室

dec は北海道でのサイクルツーリズムの推進に注力していますが、今後、北海道でぜひ実現したい取り組みがあるそうですね。

私の北海道の自宅は北広島市にあるのですが、JR北広島駅に土浦にできたような駅直結のサイクル拠点をつくるお手伝いをできたらと考えています。目下、decさんの協力も得て模索しているところですが、北広島で良いモデルをつくって道内各地に広げていけたら理想的ですね。

ビジネスとして考えているのはレンタサイクルで、電動車を含め多様な自転車を貸し出すこと。1年の半分近く雪で自転車に乗れない北海道では、在庫を抱えた販売業で採算をとるのは難しい。乗り手の体格、用途に合わせられるように自転車を揃え、メンテナンスをきちんと行い、乗り方の説明をはじめ、ルートマップや観光情報を提供するなど、駅を起点に、誰でも安心して自転車を楽しめる環境をつくりたいのです。

採算性を図るには、レンタルで一定期間使われた自転車は中古自転車として格安に販売し、レンタルでは新しい自転車を使って魅力を高める、という循環がポイントです。北広島は新千歳空港にも近く、ポールパーク建設計画も進んでいて、レンタルサイクルの潜在的な可能性は十分あると思います。月に一度、東京から北広島に戻る生活を続けてきたので、北広島の良さはよくわかりますし、さらに自転車で活性化してほしいと願っています。

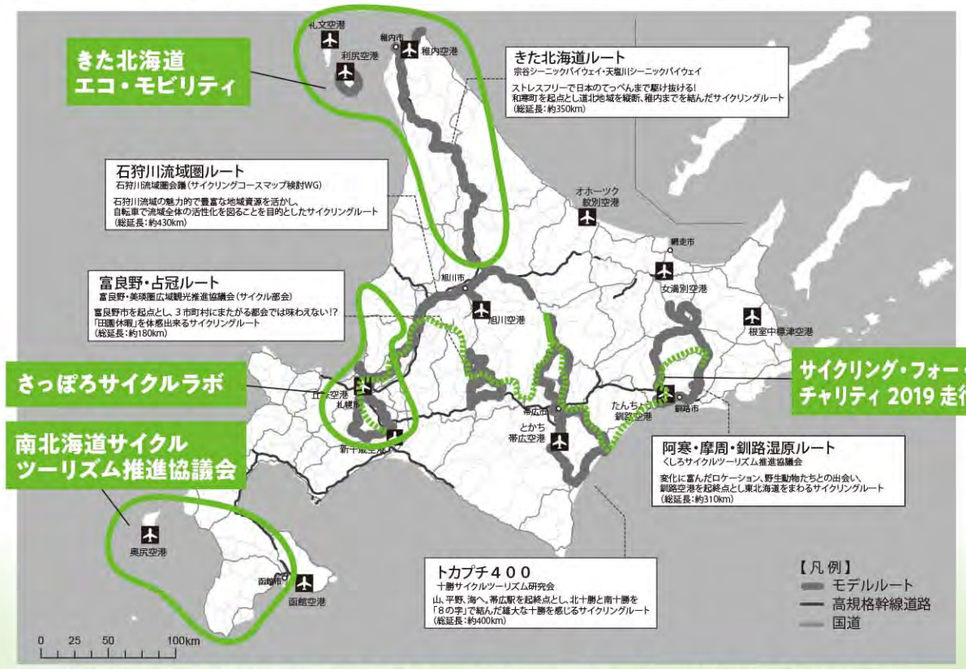
当社は静岡にも出店してサイクルツーリズム推進にもかかわっていますが、首都圏在住者にとって北海道は到着しただけで満足してしまって、さらに自転車で走り回ろうという気持ちになりにくいのかもしれないですね(笑)。自転車で楽しめるルートやスポットについてもっと情報発信し、列車やバスに自転車が乗せられるようになれば、北海道観光はもっと活性化すると思います。

シーニックバイウェイ北海道と サイクルツーリズム

平成29年5月に「自転車活用推進法」が施行され、平成30年6月「自転車活用推進計画」が閣議決定されました。その後、平成30年4月には、北海道において「北海道自転車条例」が施行されています。

このような背景のもと、国土交通省北海道開発局と北海道が事務局となって、平成29年2月より「北海道のサイクルツーリズム推進に向けた検討委員会」が設置されました。平成29年度、30年度の2か年を試行期間として全道5つのモデルルートにおいて様々な試行が行われ、その内、4つのルートではシーニックバイウェイ北海道の活動団体も参加しています。

また、モデルルート以外でも、シーニックバイウェイ北海道の活動としてサイクルツーリズムに取り組んでいる地域も少なくないことから、それらの活動状況の一部ですが以下の事例を紹介します。



▲ 試行的な取り組みが行われた5つのモデルルートとシーニックバイウェイ北海道の事例紹介エリア
[現在、2年間の試行結果を踏まえ策定した「北海道のサイクルツーリズム推進方針」に則り、サイクルツーリズムを提供する団体(ルート協議会)を募集している]
出典:北海道のサイクルツーリズム推進に向けた最終とりまとめ(H31.4.11)

自転車エクスカーションで使用した電動アシスト自転車のボロクル

「TEPPEN-RIDE 2019」のゴールとなった宗谷岬

江差追分会館で、本場「江差追分」を聞いたあとに記念撮影

「サイクリング・フォー・チャリティ2019」で立ち寄った狩勝峠

「さっぽろサイクルラボ」の ガイド付き都市型サイクリングツアーを紹介します！

dec主任研究員　中前　千佳

一般社団法人シーニックバイウェイ支援センターが事務局をしている、「さっぽろサイクルラボ」の活動についてご紹介します。

サイクリングで出会う、新しい札幌の魅力

さっぽろサイクルラボは、道内外からの観光客やインバウンドに札幌圏の新たな観光の魅力を伝えるために、自転車、コミュニティサイクル、ベロタクシー及び公共交通等を活用・連携したガイド付き都市型サイクリングツアー『ピクニックライド』の提供とガイドの養成を目的に活動しています。

『ピクニックライド』では、札幌に残る歴史的建造物をめぐるコースや、定山渓の大自然の絶景を楽しむコース、札幌市近郊の市町（恵庭市、北広島市、当別町、石狩市、千歳市）と連携し、各地域の歴史や文化、特徴ある景観や自然環境など、それぞれの地域の特色を生かしたバラエティーに富む9つのツアーコースを用意しています。

地域の魅力を伝えながら、安全に走行するためのガイドを養成

サイクルラボのガイドは、日本サイクルツーリズム推進協会が実施する「サイクリングツアーガイド養成講座」を受講し、英国のサイクリング協会（Cycling UK/CTC）のカリキュラムに基づくサイクリングツアーガイドの認定を受けており、立寄り先の説明をするのに加え、初心者の方にも安全な走行に配慮してご案内をしています。

「自転車利用環境向上会議」のエクスカーションで さっぽろスイーツと札幌の歴史的建造物をご案内!

今年は8月29日と30日の2日間に渡り開催された「自転車利用環境向上会議」に、全国から450名以上の方が参加しました。会議2日目の午後に札幌市内の自転車エクスカーションを開催し、サイクルラボのガイド5名が「さっぽろスイーツ&札幌に残る歴史的建造物をめぐるコース」として20名の参加者をご案内いたしましたので、その様子をご報告いたします。

参加者は電動アシスト自転車のポロクルに乗り、4つの班に分かれてスタート！私自身もサイクリングガイドとして6名の方をご案内しました。札幌コンベンションセンターを出発後、キラキラした川面を眺めながら豊平川沿いを走り、緑あふれる中島公園を抜けて豊平館に到着。そこで北海道開拓使の歴史を紹介しました。その後、マルミコーヒースタンド中島パークの深煎りのコーヒーとサンドイッチ専門店サンドリアのサンドイッチを頂き、再びスタート。その後、ポロクルで急坂をスイスイと登り、到着したミッシュハウスでソフトクリームを頂きながら、赤い鳥居の立ち並ぶ伏見稲荷神社で休憩。さらに、激坂を登って、標高140mほどに位置する旭山記念公園へ。公園の展望台から札幌の市街地を一望しました。その後、緑の深い円山界隈を走り、最後の目的地「北海道神宮」に到着。六花亭神宮茶屋店であんこの入ったお焼き「判官さま」を頂きました。参加者の皆さんからは「札幌にこんな緑豊かな場所があるなんて知らなかった」「電動アシストって思っていた以上にすいすい坂を登れて凄い！」「スイーツが美味しい」など、札幌の街中散走を満喫して頂きました。札幌にお越しの際は、ガイド一同お待ちしています！

自転車利用環境向上会議の
エクスカーションには全国から参加

爽やかな風の中、赤いポロクルで
豊平川沿いを気持ちよく疾走！

街中にあるサイクルフレンドリーな
コーヒーショップで一休憩

【さっぽろサイクルラボ
http://www.sapporocyclelabo.jp/】

歴史・文化を活かした 南北海道サイクルツーリズム推進協議会の取組み報告

dec研究員　佐藤　好子

道南だけが持つ独自の「歴史・文化」を最大限に活用して、自然や食と組み合わせたサイクルツーリズムの推進に向けた取組をご紹介します。

歴史・文化を活かした 南北海道サイクルツーリズム推進協議会の活動

当協議会には、シーニックバイウェイ北海道の「どうなん追分シーニックバイウェイルート」エリアを対象に、どうなん追分シーニックバイウェイと道の駅、観光協会等で構成されており、国、地方自治体等がオブザーバーとして参加しています。

平成29年に発足し、サイクリングコースの設定や、宿泊を組み込んだ旅行商品の試行、台湾サイクリストの招聘ツアー、ガイド養成のためのセミナー開催、紹介パンフレットの作成、東京など各地での広報プロモーション等を実施してきました。

旅行商品づくりの試行

2018年には旅行商品の第一弾として「にわサイクルツアーズ」（埼玉県）と連携して「北海道・道南の港町から奥尻島、そして函館へ」（7月13日～16日：JR木古内駅集合、JR函館駅解散）と題したサイクリングツアーを募集しました。募集開始後、すぐに定員8名が埋まり、第2弾、第3弾のツアー開催へとつながり、計3回24名の方が参加する企画となりました。

ツアーの特徴は、北海道らしい食や美しい景観、自然は必須ですが、地域の人がお勧めする歴史資源や現地での地元ガイド、容易なフェリーやバス等への自転車の持ち込み、地元サイクリストとの交流等を盛り込んだツアー内容です。

参加者の年齢は50代から60代で、どちらかというと女性の割合が高く、自転車旅の経験豊富な方がほとんどでした。ツアー全体としては、参加者から高い評価をいただきました。特に、あまり観光化されていない地元の方が案内する歴史、文化のスポット、地元ガイドやローカルなサイクリストによる案内や説明、北海道の中でも独特の自然と歴史景観、そして奥尻島等が印象に残ったようです。

シームレスなサイクリングツアーの実施

また、路線バスやフェリーへの自転車の持ち込みについても、輪行バックに収納しない形での持ち込みを行い、いずれもスムースで、シームレスな自転車旅をする上で、とても好評でした。

課題としては、宿泊場所へのランドリーの設置、休憩ポイントでのサイクルラックの設置、コース上の説明時間や自転車走行距離の工夫等が挙げられました。

今後は、これらの実施結果をさらに分析して、国内だけでなく海外からのサイクリストの誘客に向けた旅行商品づくりに活かしていく予定です。

奥尻島のシンボルともいえる奇岩「なべつる岩」の
前で記念撮影

江差町と奥尻町を結ぶハートランドフェリーは、自
転車の固定も完璧

「サイクリングバス」を運行し、バス後方に自転車を
積載、前方の座席に座って移動

【チャリ旅みなみ北海道
https://cycletourism-southhokkaido.org】

「サイクリング・フォー・チャリティ2019」へのサポート結果報告

dec研究員　佐藤　真人

当センターが昨年から協力しているサイクリングとチャリティーを合わせた活動であるサイクリング・フォー・チャリティについてご紹介いたします。

サイクリング・フォー・チャリティの活動目的

サイクリング・フォー・チャリティとは、子供たちの教育格差や支援ニーズへの社会的な認知度を高め、「サイクリング活動」を通じて資金面の支援の輪を広げる有志活動を行っている任意団体で、2015年から毎年、チャリティ・イベントとしての自転車長距離ツーリングを行い、寄付金を募っています。また、長距離ツーリング中に児童養護施設を訪問し交流の場を設けるなど、スポンサー、フォロワーに対する教育格差に対する認知度向上に努めています。

十勝学園での交流の様子（帯広市）

2019年ライドツアー　北海道の夏旅の概要

当センターでは、2018年から北海道での活動において、コースの提案、地域の方々との交流などの調整等、サポートを行ってきました。今年は、7月20日から27日の日程で新千歳空港をスタートした後、石狩、空知、上川、十勝管内を経由し、釧路管内へと向かい、標茶町のコッタロ湿原をゴールとした約800kmの行程を大きなトラブルもなく無事、ゴールまでサポートいたしました。

こだわりの店　はらっぱ立ち寄りの様子（豊頃町）

道東におけるツアーの様子

私が主にかかわった道東地域（7月23日～27日）にはいってからの一部をご紹介いたします。東道1日目は、7月23日に霧の中、狩勝峠を越えて、新得町から始まりました。その後、そばの館、然別湖畔といった観光地や景勝地に立ち寄りながら、上士幌町のぬかびら温泉で宿泊しました。2日目は、三国峠まで登った後、帯広でゴール、3日目からは、地元のサイクリストたちも駆けつけ、ガイド等のサポートに加わって頂き、帯広市内の庭園を散策した後、本ツアーの主目的でもあります児童養護施設十勝学園に訪問し、職員や児童の方々とゲームやバーベキューで交流しました。その後、豊頃町のファームレストランで地元食材を使用したおやつを堪能していただき、農家さんなどと交流しました。4日目は、今ツアーでは初めての海岸線を走行するコースで釧路市を経由し、鶴居村のサイクリストにやさしい宿ホテルTAITOに向かいました。最終日、釧路湿原国立公園にある標茶町のコッタロ湿原展望台で、無事、ゴールすることができました。

自転車のトラブル等もありましたが、大きな問題はなく、エゾシカやタンチョウも途中で一緒に走ってくれたりと楽しんでいただけました。

サポートタクシー（阿寒観光ハイヤー）

タンチョウが一緒に走ってくれました（鶴居村）

シカも一緒に走ってくれました（幌鹿峠：上士幌町）

「きた北海道エコ・モビリティ」におけるサイクルツーリズム推進に向けた取組み報告

dec主任研究員　冨田　真未

天塩川シーニックバイウェイと宗谷シーニックバイウェイの広域連携「きた北海道エコ・モビリティ」のサイクルツーリズム推進に向けた取組みをご紹介します。

きた北海道のサイクルツーリズムが止まらない！

きた北海道エコ・モビリティでは、豊かな自然環境を活かしたアクティビティ体験と公共交通などを上手く組合せ、スロウな移動による周遊性の向上や滞在時間の長期化による経済効果が生まれることを期待し、これまで様々な取組みを行ってきました。特に自転車を軸とした取組みは、広域で連携を進めているものが多く、例えば、サイクリング周遊コースの設定や受け入れ環境の整備、SNS等を活用した情報発信、エリアのブランド化を目指す広域サイクリングイベントTEPPEN-RIDEの実施など、その勢いは増すばかり。取組みを始めた頃（4年前）に比べ、サイクリングを目的に訪れる人や地元サイクリストも増え、エリア全体のサイクルツーリズムへの機運が高まる中、地元で案内できる人の必要性を感じ、“いつ来ても安全に・安心して案内できる環境”づくりとして、今年、ガイド育成を目指した講習会を実施しました。

自分の考えやコースづくりについて発表し合うディスカッションタイム

地域力をアップ！「サイクリングガイド養成講座in名寄市」の開催

令和元年6月19日（水）・20日（木）の2日間、日本サイクルツーリズム推進協会（JCTA）の西田恵理子氏を講師にお招きし、サイクリングガイドのスキルアップを目指した「サイクリングガイド養成講座」を名寄市で開催しました。内容は、自転車文化が深く根付くイギリスのサイクリング協会のカリキュラムに基づくもので、Cycling UKのガイド資格も同時に取得でき、地元のみならず全道各地から参加いただき、英国人ガイドの参加もありました。西田氏からは、ガイドする際の考え方や必要となるスキル、リスクマネジメントなど、お客様を安全に案内するために必要な“心得”を学びました。参加者間でのディスカッション時間も多く、自分の考え方や行動について新たな視点で見つめることができる有意義な時間となりました。

ガイドとお客様の両方の立場で行う屋外実習。各人の実施内容について良し悪しを指摘し合う時間はとても貴重でした

「TEPPEN-RIDE 2019」と日本のてっぺんガイド

旭川から宗谷岬までを自転車のみで走りきるサイクリングイベントTEPPEN-RIDEは、今年で4年目を迎えました。ガイド認定を受けた地元在住の方々が、今年のコースを案内。彼らが中心となって、入念なミーティングを繰り返し、何度も走行してはタイムや路面状態を考慮したコースの見直しを行い、サポート体制について検討していました。全員ケガも無く笑顔でゴールできたのも、「どの時間も良かった」「サポートが素晴らしい」「今度は友達を連れてくる」という声を聞けたのも、これまでの努力の賜物。安心と安全を届けることはもとより、地域を誰よりも良く知る人達が案内することで、心にぐっと残るものがあることを強く思いました。来年は開催5周年！是非、チェックください。

「TEPPEN-RIDE」の休憩ポイント、カフェでのひと時。今日会ったばかりの参加者が皆友達になる瞬間

【きた北海道エコ・モビリティ
http://northernhokkaido-ecomobility.jp/】